ありがとうの思い

ファイザー株式会社 札幌医薬支店
住出 尊史

今回、この懸賞論文に応募したのは、MRという仕事を通じて人として少しは成長できたのではという思いがあり、そうした機会を与えくれたファイザー、また私の成長を見守り指導いただいた会社の先輩、顧客や家族といったすべての方々に感謝の意を述べさせていただきたいという気持ちからである。MRの仕事の中身もよくわからなかったが、まったく違う業界から転職して7年目となる現在、MRを志したきっかけとそのときの初心を振り返ることで「MRになってよかったこと」というテーマに応えたい。

1．母の死と医療への興味

医療に目を向けるきっかけとなったのは、母の病と死である。39才で私を産んだ母は50代になると高血圧症となり、一過性の脳虚血を起こしたことがあった。そのときの症状は軽いもので本人やまわりも重症とはとらえず、病院通いも続かなかった。しかしその後、カレーの作り方を忘れる、TV のリモコンがうまく使えない、体の左側に麻痺が残るなど、日常生活に支障を来たすようになり、脳梗塞が起きていた事は明らかなものとなった。やがて発語に問題が生じ、一人で外を歩くのもままならなくなり、日常生活を過ごすのが困難となった。大学卒業が間近で就職を控えていた私は、すでに社会人となっていた妹と話し合い、悩んだ末、母を施設に入居させることを決めた。

しばらくは平穏な日が続いたが、母が69才のとき、容態が悪くなって緊急入院することになった。何度か繰り返した風邪の後、ある日突然、体を痙攣させ意識を失ったのである。母はこちらを見るともなく眺める様子であった。首の付け根に栄養を流し込む注射針がさされ、口には人工呼吸器の透明なマスクがあてられている。ベッドの横のモニターには心電図といくつかの数字。むろんその意味もよくわからず、私は母の手を握る。母は握り返さない。ただこちらを見ている。入院してから3ヶ月経ったある日、容態が急変して母は還らぬ人となった。

私がそのとき感じたのは大きな無力感である。私には母を救うことができないし、病気がどんなもので、どんな治療法があるのか想像すらできない。私にできることは死に近づいていく母の手を握って見守ることだけだったのである。私は大きな無力感を抱き、自らの無知を悔やんだ。「もう少し何かできることがあったんじゃないだろうか。」 そんな思いが頭を巡る。

2．MRという仕事を知る

母の葬儀を済ませた後、私は日常生活に戻っても、しばらくは無力感の中で医療への関心を忘れたように忙しく日々の仕事をこなしていた。母が亡くなった一年後、私は久しぶりに中学の同級生と再会し、そこで初めてMRという仕事があることを知った。MRの彼曰く「病院でお医者さんに薬の宣伝をしたり、薬の有効性や副作用について情報を提供することで、医療に貢献できる仕事だよ」と言うのである。大手スーパーで働いていた私は初めて聞くMRという仕事にどんどん興味が湧いてきた。彼は私に言うのである。「やりがいのある仕事だよ」と。私は母の死から何かを学びたかった。「母はもっと長く生きられたのではないか、その方法があるのではないか」そんなことを考えていたのである。私は、MRという仕事は母の死を深く知り、一人でも多くの命に向き合える仕事ではないだろうかと興味を持ったのである。

3. MRになって

その後、私は縁あってファイザーに入社することになった。2001年のときである。MRになることで母の死から学んだことを何かに活かしたい。そのことが母の供養になるのではと考えたのである。そのきっかけと成長の機会を与えてくれた会社と会社の諸先輩に、また多くの顧客や家族にも私は感謝の気持ちでいっぱいである。今、少しでも医療に貢献できているのであろうか。この程度の知識でいいのだろうか。お得意先の役に立てているのであろうか。常に自問自答する。だから私が本当に嬉しいのは病院の先生に「君のおかげで・・・」とか「ありがとう」と言われる瞬間である。毎日、その一言が励みとなっている。その一言が亡き母の「がんばれ」に聞こえてならない。

私は背筋を伸ばし、今日もまた廊下に立つのである。日々、歩けること、話せることに感謝しながら。そして、医療に貢献できることを感謝しながら。　（MR経験7年）